

塚 原

一

これから、佐渡の大聖人を書くつもりでおるが、まだ、佐渡に行ったことのない人のために、佐渡の島の話をしてみたいと思う。

佐渡の島と言えば、およそ、大聖人の門下を以って任ずる人ならば、一生のうちに、一度はいつてみたいと誰しも思う所である。だから、日蓮門下の人々で佐渡に行く人は多いと思い、佐渡に行く人は、必らず、日蓮門下の人だろうと錯覚するが、これは本当に錯覚であつて、一般の観光客と日蓮門下の比率は十分の一といつてよいと思う。最近の統計でも佐渡の観光客は年間二十万人と言われ、島の重要資源となつている。これにつけて皮肉にも思い出されることがある。

それは、佐渡の帰りの観光バスで、いよいよ港に近くなつた時である。バスガールが最終的挨拶をした後で、「皆様方いよいよ両津港から、御乗船でございますが、船中の安全をお祈願致し

まして、当観光バスより、御守り札を差し上げます……」云々と言って、乗客に御守り札を無料で分けていた。私は勿論必要がないから、拒否したが、隣の人が貰った御札をみたら、それが真言宗で発行したお守り札であったのには、思わず、うーむとびっくりした。

この観光バスの旅程中でも、三か処程、大聖人ゆかりの地に案内して、大聖人の佐渡の御苦勞をバスガールが説明しておるのである。だから御守り札は、それらの寺の中から発行したものである。思うのが普通だが、なんと、それが観光の日程にはない真言宗の発行の御札だから驚いたのである。

きいてみると、佐渡では日蓮宗の寺よりも真言、念仏等の寺々が未だに多いそうである。日蓮正宗の寺はまだ一軒もない。(註一) こう、思うと、われわれは大聖人さまが、御苦勞した佐渡の島を、いまだに、大聖人を苦しめた宗派の人々にまかせておるのである。先ず發奮しなければならぬ。

こんな風だから、佐渡に行く人々全部が、日蓮大聖人の信者だなどと思つたら大間違いである。新潟、長野、富山、石川あたりの商店街の招待旅行は先ず観光の島佐渡と相場がきまつておる程だ。佐渡は今、日本でも有数の観光地となつておる。

或る日蓮門下の旅行で佐渡靈跡参拝に行った時の話である。帰りの船の中で、待合の女将らしいのが引卒者の僧侶に「お祖師様も、なんか悪いことをしたのですか、佐渡なんか流される

なんて……」と質問したそうである。さすがに引卒者の僧侶も驚ろいて、「あんたは、何んの目的でこの旅行会に加わったのですか」と聞いた。すると、女将は平然として言った。「わたしは佐渡で、岡本文蔵さんの本場のおけさ節をきいて、帰りには、東山温泉で、会津磐梯山は宝の山よのほんものをきくために来たんですよ」と云った。それ程佐渡は「おけさ」と観光の島であり、詩と夢の国と今はなっているのである。私の親戚の者が、盛んに佐渡に行った話をしているので私は佐渡にいったのだなあ感心なことだと喜んで、聞いておつたが、一向に大聖人の靈跡の話が出ないので不思議に思つて聞いてみたら、実は佐渡に米の買出しにいった話なので驚ろいたことがある。

佐渡の国中平野をバスが通る時、ガイドが説明する「佐渡は二十六万石の米を産出致します。人口は十二万二千ですから、約十三万石の米の輸出国でございます。私共は、ここに生れてここに育ちましたので、佐渡を島だとは思っておりません。皆様、ここが国中平野の真中でございますが、まことに、この広々とした水田、誰がここを島だと思ひましょうか」印象に残つた説明であつた。

荒海に春きにけり新潟の

寄居（よりのい）の浜に佐渡の島みゆ

広 澄

佐渡というと、頭の中に小さな島が浮かんでくるがとんでもない話で、新潟の浜でみる佐渡は実に大きなものである。佐渡は四十九里波の上というのは、能登半島からの距離であるという。新潟からは十一里強であり、大聖人が佐渡に出帆した寺泊からは僅かに八里である。私は快晴に恵まれた日に新潟の寄居浜から、佐渡の島を望見することが出来たが、余りにも島が大きく見えるので、最初は佐渡の島だと信ずることが出来なかつた程である。丁度浜を漁師の人が通つたので、あの島は何処の島ですか、（自分の地理音痴を告白しておくようで申訳がないですが、実は余り大きいので能登半島かと思つたのだ）ときくと、佐渡の島ですと言うのである。へえと言つても、余り大きく友えるので、佐渡の島はあれではないですかと、粟島あむしまを指したものである。粟島は新潟県岩船郡に属し海岸より二十八軒の海上にあつて、東西約二軒、南北四軒の島である。さすがに、その漁師は私の言葉をきくと、気狂いとも思つたのであろう、黙つて行つてしまつた。後で、地図をみて、私は自分の間違いに啞然としたものである。

行かない人は佐渡は小さいと思うが、行った人々には佐渡はなかなか大きな島である。

改めて、地図をみたら、佐渡は周囲二百七十七軒、面積八百五十七平方軒、人口は十二万二千の日本列島第五の島であつて、新潟港を出た佐渡汽船の定期便は、約二時間半で佐渡の両津港に入ると書いてあつた。

大聖人は文永八年十一月一日、佐渡の守護職である本間六郎左衛門の家のうしろの一軒の御堂に入った。堂とは名のみで、四方の壁はとつくにおちて、床の間のすきまからは縁の下に積った雪がみえる。最初の間は寝ることもならず、床の間に、敷き皮をして雪が遠慮なく吹き込んでくるので、蓑を着て坐っておるといふ有様であった。杉や松の大本が多いので、堂には陽の光りはささなかつた。夜になると、雪や雹にまじって、雷鳴がきこえて、時々稲妻の光りが、御堂の中大聖人をうつし出すのであった。大聖人自らも、「心ぼそかるべき住居なり」とおっしゃっておる程である。

しかも、御堂の場所は塚原といつて、死人の埋葬地であり牛や馬の死骸を捨てる所でもあった。

だが、外観は斯くの如くみすばらしかつたが、大聖人の心中は天地雲泥の相違であつた。それを種々御振舞御書から引用してみる。

「あらうれしや、昔檀王は阿私仙人の下に法を求めて、千年の苦行を積んで、法華経の功德を得られた。不軽菩薩は、増上慢の人々から杖でうたれたが、法華経の行者となつた。今日蓮は末法の世に生れて、妙法蓮華経を弘めんがために、このような責めにあつた。仏の滅後二千二百余年の間、法華経を弘めた天台大師といえども「世間にあだするものが多くて信じ難い」といふ、法

華經の文を身を以つて讀まれてはおられない。「法華經の為に度々追放される」という法華經の明文を、身を以つて讀んだのは、日蓮ただ一人である。仏は法華經の一句一偈を修行しても、皆成仏の保証をあたえると説かれたが、その功德を受けるのは日蓮である。法華經を修行して仏になることは疑のないことである。斯く考えると、日蓮を流罪に処した北条時宗は、日蓮がために善知識である。竜の口に、日蓮を斬首しようとした、平左衛門こそ、釈尊におけるダイバダツタみたいなものである。斯く考えると釈尊の生存時代が、今の世に再現したのである。在世は今にあり、今は在世である。法華經では、この事を諸法実相と説かれ、又本末究竟等ともとかれて、善悪ともにすべて意味があり、仏の不思議の力の現われであるということである。天台大師は「摩訶止観」の第五に「修行と智恵が進めば、三障（一、罪障―過去の因業によつて生ずる罪障。二、業障―現在の行為より生ずる罪障。三、煩惱障―現在の煩惱より起こる罪障）四魔（一、五陰魔、身心和合せざる所に起る魔。二、煩惱魔、煩惱より生ずる魔。三、死魔、死をおそれ又は死をこのましむる魔。四、天子魔、第六天の魔王が、仏道を破壊するの魔）ふんぜんとして競い起る」とある（中略）若し僧侶があつて、善根を積んで念仏、真言、禪、律等々の修行をして、法華經を修行しなければ、第六天の魔王は、その僧に対して、親の如き想いをかけたり、多くの人々にみいつてその僧をもてなしたり供養せしめたりするのは、世の人々にその僧を眞の僧と思わせる為である。たとえば、国主が尊敬する僧は、人々も供養するようなものであり、その

反対に、国主が仇敵とする、この日蓮は、正法を行ずるものである。

積尊の為には、ダイバダッタは第一の善知識である。世間の例をみても、味方より敵の方が人をよくするものである。只今北条一門の繁栄は、北条氏を亡ぼさんとした和田義盛と後鳥羽法皇があつたからである。もし、これらの人々がいなかったら、北条氏が今日の如く日本の主となつてはおらなかつたであらう。だから、北条氏一門の為には、法皇や義盛のような人々が、味方のようなものである。

日蓮が仏になる第一の味方の人々は、一番始めに、日蓮を殺害しようとした東条景信、平左衛門頼綱、北条時宗等々、僧侶では良観、道隆、道阿弥陀仏等々であつて、このような人がいなかったならば、日蓮はどうして、法華経の行者になることが出来たであらうか」(全集九十六ページ)

(註一) 此の項の執筆は昭和三十五年七月であり、その当時の佐渡には日蓮正宗の寺院はまだなかった。

しかし現在は妙護寺が建立されている。

一一

「何処に行かれますか」

「おやつ、そなたは御僧侶ではないか、何故、私の行き先を尋ねられる」

「この先には人家はありません。それを行かれるので、尋ねたのです」

「ううむ、……して、貴公はこの路ばたでなにをなさっておるのか、それをききたい」

「愚僧はここで修行をしております」

「修行と言われるか、見受ける所、袈裟法衣の形から、真言か律宗の僧と思うが、その僧侶が、雪中にたたずんで、人を伺う容子、如何なる修行をなさっておるか、伺いたいものでござる……」

こう言われると僧侶はぐいとつまつた。折柄から風がさつと吹いて、頭上の杉の小枝の雪が、両人の間にどさつと落ちたので、思わず、二人とも飛びすさつて、顔を見合せた。

二人ともけわしい顔付きである。一人は鳥帽子直垂を下に着て、上に蓑をきている相当老年の武士であり、一人は合羽を羽折つた僧侶であつた。ここは大聖人のいます、塚原の三昧堂に通ずるちいさな路上であつた。

時折り雪がふぶいてくると、二人の影がみえなくなる程の雪である、が、十二月という、今頃の季節になれば、この佐渡の島では当然のことであつた。山鳩がバタバタと大きな羽音をたててすぎさつていった。これをきつかけに再び問答が交わされた。

「なんと申せ、ここを通つて塚原に行くことはなりません」

「どうしてもか……」

「左様、どうしても」

武士は刀に手を掛けた。

「これでもか……」

「そうなれば、愚僧御相手するだけ」

「ううむ、貴僧は日蓮とやらの弟子か」

「違います」

「なんじや……」

「その反対の者です」

「それをきいて安心した。それならここを通しなさい」

「何故でございますか」

「その仔細は、儂を通せば、一刻もしたなら訳が分かります」

「それはどういうことですか」

「分からぬ御僧侶だなあ、これだ、これだ」

その武士は太刀の柄（つか）を叩いてみせた。

「ええつ、それでは」

僧侶は首をすくめて驚ろいた表情をした。

「驚ろくには及ばぬこと、おそらく、貴僧もそれを願っておる筈であらう、が……」

武士はにこつと笑つてみせた。

「素性を言わねばわがらぬが、それがしは遠藤為盛というもと北面の武士で、順徳上皇様が承久三年佐渡におうつりになつた時、妻と共に随行して参つた者だ。上皇様に給仕御奉公すること二十四年、上皇様は恨みをのんでついに仁治三年、佐渡の土となられた」

「では、あのこの島で有名な阿仏房殿か」

「左様その阿仏房じゃ、上皇様の真野の御陵のほとりに、草庵を構えて、丁度今年で三十年、毎朝毎晩、念仏を唱えて上皇様の御冥福を祈りつづけてきた者じゃ、それ故に、いっとなく阿仏房と名づけてくれた」

「左様でございますか、愚僧はお顔をみるは今日始めてでございますが、阿仏房さまの御名前は、この島の名物とみえて島につくと早々に伺つておりました。でも、その御方が雪のふるこの夕方、こんな所に……」

「それは、先程、貴僧に言つた」

「……では、日蓮法師をあやめに……」

「日蓮が首を斬らねば、この阿仏房が、毎朝毎晩、安心して御陵の前で、念仏を唱えておることが出来ぬのだ」

「それは一体どういう訳でしょうか」

あたりは夕方だというのに、雪のために明るく杉小立の間からみえる空が、ただ墨のように暗いだけであつた。

阿仏房は続けて語つた。

「三十年も唱えつづけてきた念仏が、無益であつたら、この阿仏房はなんとしたらよいか。きけば、日蓮という法師は、念仏無間、禪天魔、真言亡国、律国賊と言つておるとか、外のことはどうでもよいが、念仏無間だけは言わせておけぬ。もつたいなくも、順徳上皇さまは、真野真輪寺の阿弥陀堂にて崩御されたお方である。故にそれがし夫婦で称名念仏すること三十年。一日一万辺として一年に三百六十五万辺三十年で一千九百五十万辺、これが無駄であつてたまるものか。念仏の故に地獄に行くなぞもつての外である、鎌倉はいざ知らず、この佐渡では、日蓮とやらは生かしておけぬ。さあ、これなら通してよからう」

「わかりました。わかりました」

僧がこう答えた時、杉木立の中から、同じ様な僧侶が二人路傍にとび出してきて、

「善観殿、御苦勞、御苦勞」

「さあ、吾等が交代じゃ」

と言つた。

「交代とは何んじや」

阿仏房が問うた。

善観と言う僧侶が黙っておると、交代にきた僧侶がこともなげに言つてのけた。

「吾等はなあ、ここにもうかれこれ一月になるであらうか。塚原の日蓮坊を飢え死さすためにここでこうやって見張っておるのが役目の者じや」

「それは、誰に頼まれて……」

「それは、この佐渡の御領主さまである武蔵守宣時さまと、鎌倉の極楽寺の良観さまの御二人からの御命令だ」

「そうだそうだが、吾等は兄弟子道観さまやこの善観さまと、鎌倉から佐渡の島に、日蓮法師の後をつけて来た者じや、念仏の仏敵をほうむるために態々やつてきたもの」

善観と言われた僧侶が、つけ加えた。

「阿仏房様も我等の味方であるから申しますか、佐渡の念仏宗の唯阿房様、生喻房様、印性房さま慈道房様、いや、佐渡の島中の念仏宗、禅宗、真言宗、律宗の御僧侶は皆な我等の味方です。

仏敵日蓮をほうむらんがため、日蓮がすむ塚原の四方の路は、全部我等が手で固めてある。通路通路に、このように見張りをたてて、昼夜監視を厳にして、一粒の米も一滴の水もおさぬ様に見張りしておる所です。間亀なく日蓮は飢え死する筈です」

「日蓮を飢え死させては遠藤為盛、武士が立ちません。仔細は、後刻、御免つ」
老人とは思えぬ勢いで、ふり始めた雪の中に消えて行けば、残された、三人の僧侶は、顔見合せて、にっこり笑うだけだった。

夜も昼も雪ばかりふりつづいて、昼夜の差別はつきかねるが、雪の中に雹がまじり、稲妻の光るのが夜であり、風が、ありもしない壁をゆすって敷板の下の板間から吹き上げてくるのが昼であつた。勿論日の光は一向にみえない。

大きな杉や松が、塚原の三昧堂におしかぶさっていた。ここは死人を埋める所であり、牛馬の死骸を埋める所であつた。訪ずれるものは松籟の音と、時折、枝からおちる雪の音だけであつた。

今は時折、稲妻が光るのでたしかに夜に違いない時刻であつた。

大聖人は、夕の読径であろうか。

自我得仏来、所経諸劫数

無量百千万、億載阿僧祇

.....

と経をつづけて、

一心欲見仏、不自惜身命

と読誦していた時である。すうつと後から刀が大聖人の頬にせまつた。

時我及衆僧 俱出靈鷲山

.....

依然として読経する大聖人……

「やめぬか目蓮坊、経をやめやめやめつ」

堂の中に入って抜刀を大聖人につきつけたのは、遠藤為盛である。

大聖人は静かに、読経をやめると、向きを変えて、為盛と向いあつた。正座する大聖人の前に土足抜刀の為盛がいた。

「何の用か……」

「汝の首を所望じゃ」

傲然と言い放つ為盛だつた。

「日蓮は竜の口でこの首を所望されたが、再び今宵は、佐渡において所望されたか。だが、何故、日蓮の首を所望するのか」

「仏法の為じゃ」

「なに、仏法の為と言うか、仏法の為と言うのなら潔よく首をさし上げよう」

「呉れるか」

「差し上げるぞ」

「おうっ」

為盛は威勢よく太刀を振りかぶった。

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

大聖人は何時もと変わることなく、静かに唱題された。唱題をみとどけた為盛は、にっこり笑って、もう一段と太刀をふりあげた。折から枝が折れたか、どどつと雪の落ちる音が三昧堂の背後にして、ぴかっと光った稲妻に、二人の姿がうきぼりにされた瞬間である。

「ううむ…」

うなつた為盛は、

「斬れぬ……残念っ」

と言ったかと思うと、強く刀を大聖人ならぬ板の間にふりおろし、堂とばかりに尻もちをついてしまった。

「仏敵が、斬れぬ筈がない。今日本中の人々が仏敵としておる、この日蓮が何故斬れぬ、不思議だ、不思議だ」

とつぶやきながら、残念そうに大聖人の顔をみるのみであった。

為盛は刀を鞘におさめると、大聖人の前に正座した。そして暫く言葉もなく大聖人を茫然と眺めるのみであった。

「日蓮坊なせ膿が、斬れぬか、訳を話してきかせてくれ、秘法をつかうと他人からきいたが、本当か……」

「はあ、はっはっ……」

三昧堂の名ばかりの壁が落ちる程大聖人は笑われた。啞然とした為盛……

「この日蓮が秘法を使うと言われるか、それは面白い、使うかもしれないぞ」

「では、噂の通りか……」

「まだ合点が早い、日蓮が使う秘法は、教主釈尊がこの末代吾等衆生の為に、残された法華経という秘法だ、法華経こそ一切衆生をたばらかす秘法なりとの言葉もある」

「その秘法とか言う、法華経と言うものはどんなものじゃ、教えてくれぬか」

「抜刀をして、破れたりと雖もこの三昧堂に土足で上つてきて、その果ては教を請うつもりの人
は、何処の何んと言う人か」

大聖人の威勢に打たれて、遠藤為盛は思わずはあつとなつて身をしりぞけると、思わず町重な礼をするのであつた。

「私こそは遠藤為盛と申すもので、順徳上皇の御陵を夫婦して守ること三十年、この佐渡の島に在ること実に五十一年の者にございます。三十年来念仏を唱えて御陵を御守護しておりますのに、念仏の悪口を言う日蓮と言う僧が、この三昧堂に近頃おるときき、あわよくば、それをしめて、仏恩を報ぜんものをと、今宵まかり越したものでございますが、何故か、防ぐ術もなき御僧が、斬れませぬ。この不思議さは何処からくるのか、とまどうばかりでございます」

「それは、日蓮が身によむところの法華経の真文の致すところと言う外はない。日蓮が只今この佐渡において身に読むところの法華経とは、これを説かれたる釈尊御自身も未だ読まぬところの法華経であつて、末代に出生したる法華経に言うところの斯の人たる者が読むべき法華経である。仏滅後二千二百二十余年いまだ嘗て、誰人もよむところなき法華経の真文に外ならないのである。斯かる不思議な法華経を身に行ずる日蓮を、念仏修行三十年と言えどなんでされるものであろうか」

「御身が法華経を行ずる不思議な身であることはわかつて、何故念仏の悪口を言うのか、これがわからぬ、いずれも同じ仏説ではないか。譬えば、木に松柏の別あつても、誰しもあなどらず、華に梅桜の区別あつても何人も悪口を言う仁はおらない。然るに仏説にだけ、これを是とし他を非とするの掟てがあらうとは、これ仏説とは思えず、ただ我田引水の小意見としか受けとれぬ

が、これは如何なものであろうか」

為盛は意気ごんで、大聖人に問うのであった。大聖人はえたりと、につこり微笑されて答へられた。

「左様々々、日蓮もさもやと思えたのである。南無妙法蓮華經と唱える口で南無阿弥陀仏と唱えても、同じ仏説なればよからうと思つたのである。ところが法華經にはただ大乘經典を受持することを願つて、余經の一偈をも受けずとある。法華經を行ずる人が一口は南無妙法蓮華經、一口は南無阿弥陀仏など唱うるのは、飯に糞をまじえ沙石を入れたようなものである。たとえば、皇后（きさき）が大王の種をはらんでも、民にとつげば王種と民種とまじつて、天の加護と氏神とに捨てられてその国を破るの縁となる。父二人出来れば、王にもあらず民にも非ず人非人となるのである。貴殿が三十年も順徳帝の御陵に、念仏申し上げたのは何の為か」

「言わずと知れたこと、先帝様の御冥福を祈り、成仏を願えばこそである…」

「噫呼悲しき言葉を眼前にきくもの哉、昼夜朝暮に弥陀念仏を申す人は、薬はめでたしとほめて朝夕毒を服する者である。しかも念仏は成仏の種とならず、何百万返唱えても、南無阿弥陀仏ではおぼつかない、その証拠は、貴殿が毎朝毎晩に読まれる阿弥陀經の中にある。阿弥陀經の中で、舍利弗舍利弗と三十八回も、名前を呼ばれたる舍利弗尊者は、阿弥陀經では成仏せずして、法華經において華光如来という仏さまになっておる。阿弥陀仏も、その昔は法蔵比丘と言つたお

方であったが長いこと法華経を修行して、始めて阿弥陀仏という仏になられたのである。故に阿弥陀仏は、第十八の願に、法華経を誹謗するものは救われないと言われておるのである…」

為盛の意外と言う顔付は、漸次に心服という顔色に変わって行くのであった。

「遠藤為盛と言われたなあ…」

「はいっ」

為盛の返事はすなおであった。

「貴殿は貴殿が五十一年も御奉公申し上げた順徳帝が、一天万乗の大君にましましながら、何故、この辺土の地におうつしされたか、その理由を考えたことがあるか。本朝開闢以来叛逆のもの総じて二十六人、第一は大山王子第二は大石山丸、乃至第二十五人は頼朝、第二十六人目は権太夫北条義時である。古来王法に敵して亡びざるものなしと言うに、何故北条義時は亡びずして、後鳥羽上皇は隱岐の島に、順徳上皇はこの佐渡島に、土御門上皇は謀議に加わらずして自ら土佐に配流を願われ、雅成親王は但馬に、頼仁親王は備前にと各々配流という、この七華人裂の最後は如何なる宿因によるものであるか、その原因を考えられたことがあるか、如何じゃ」

「……………」

為盛は只々黙念とするのみであった。

「然るに日本国中これを不思議と思う者が一人もない。すめら御国のみかどとなられる御方様は、仏法上では五戒十善の君と申し、また天照太神の御霊のおんかわらせ給う御方と申し上げるのに、何故臣下の謀叛に破ぶられたのか、日蓮は：為盛殿、実はこの事を不思議と思つて出家得道したのだ」

大聖人は思はず言葉をきつた。

思い出したように、雪は三昧堂の四辺にふりつづけていた。為盛は姿勢をただすと、きつと大聖人を仰ぎみるのであつた。

「…結句は、仏法は体の如し、世間は影の如し、体曲がれば影ななめなりとの結論に達したのである。正統な仏教が忘れられて、邪法邪宗の邪義が世に行なわれて、人心をまどわすから、政道も人の道も人々の生活もいや天地の運行すら、時を以つてめぐらずとなるのだ。譬えば二仏並存の真言の思想は一國に二王の争いとなり、弥陀を以つて釈尊よりすぐれりとする念仏の考えは、臣下を以つて王よりすぐれたりとの下剋上の考えとなるのである、恐ろしいことではないか。人王八十一代をば安徳天皇と申す、父は高倉院の長子、母は大政入道の娘建礼門院なり、この王は元暦元年三月二十四日八島にて海中に崩御遊ばされた。この王は源頼朝將軍にせめられて、海中のいろくずのえじきとなり給う。入王八十二代は隱岐の法皇と申す、高倉の第三王子、八十三代は

阿波の院、隱岐法皇の第一の王子、八十四代は佐渡の院、隱岐法皇第二の王子、承久三年二月二十六日、王位に即き、同じ七月に佐渡の島に遷され給う。この二三四の三王は父子である。鎌倉の右大将の家人義時に責め落されたのである。そもそも承久三年の四月十九日には、天台の座主慈円僧正を始めとして、仁和寺、三井寺の高僧四十一人を集めて、この法を行なうことは日本に第二度なりという十五壇の秘法を修し、五月二日には如法愛染明王の法を紫宸殿に行ない、六月九日には守護経の修法を行なつて、北条義時を調伏せしめたが、その結果は如何にと言うに、仏法の力もかなわず、王法の威力もかなわず、見るも無残な敗北ではないか。義時の御魂と姓名を、書きつけて、諸仏諸神の御足の下にふませて額に脂汗をながして祈つてはみたが一年も一月ものびず、僅か一日か二日の合戦で、天皇の軍は負けたのである。日蓮は、このことを疑つて、幼少の頃より随分と顕密二道、ならびに諸宗の一切経を或は人に習い、或は我から開見して勘えたるに、その道理が相わかつた。我が面をみることに明鏡による如し、国土の盛衰を計ることは仏鏡にすぐべからずと悟つたのである。即ち今日蓮一代聖教の明鏡をめつて、日本国を浮かべて見るに、この鏡に浮かぶ人々は国敵仏敵たること疑いなし、一代聖教の中に、法華経は明鏡の中の神鏡なり。銅鏡は人の形をば浮かぶれども、いまだ心をば浮かべず。法華経は人の形を浮かぶるのみならず、心をも浮かぶ、心を浮かぶのみならず、先業をも、未来をも、かんがみ給うこと曇もなし。法華経の第七の巻には、如来の滅後に於いて、仏の所説の経の因縁及び次第を知つて、義

に随て実の如く説かん、日月の光明の能く諸々の幽冥を除くが如く、斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅すとある。……」

「わかりました。わかりました」

為盛は悲痛な叫びを上げながら、矢庭に三昧堂から飛びおりると、たすきがけにしていた胸紐をゆるめて、左手に念仏の数珠をとり出し、高くほうったかと思うと、さあつとこれを抜き打ちにした。珠はばらばらと雪上に散った。

「上人、為盛この通りでございます。只今よりは、南無阿弥陀仏ではございません。南無妙法蓮華経と唱えます」

雪の中に身を埋めて、合掌しつつ大聖人を伏し拝むのであった。

「祝着、為盛殿……」

「御上人さま……」

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

折から、激しくなった雪にも負けぬ題目の音が、塚原の山野に響くのであった。

「お婆々、もどつたぞ」

「おやつ、お帰りなさいまし」

為盛は土間で、蓑の雪をうち払いつつ声をかけた。ここは順徳上皇の御陵に近い、遠藤為盛のすまいである。

どつかと、炉辺の前にあぐらをかくと、たきぎを思いきつて火にくべた為盛、赤々と火がもえ上つて、女房と顔を見合せた。

「旦那さま、お忘れものがあるのでは、ありませんか」

女房が声をかけた。

「忘れもの、言うど……別に……」

為盛は、下をうつむいて、もえる火をじつとみるのであった。

「でも、旦那さまは、日蓮坊主の首を引きぬいてきて、順徳上皇の御陵に捧げなければ、これから、朝夕、念仏が唱えられぬと、言いきつて、おでかけてしたが」

「左様、俺も、その時は、そう言ったが」

「言つたがどう致しました」

「……………」

「手ぶらで帰つたところをみれば、負けましたか、ええつ不甲斐のない亭主殿……」

為盛の女房は思わず、炉辺の薪をぎゅつと握りしめて、

「明日から、どんな気持で御陵の前で、念仏を唱えるのでございますか。念仏の悪口雑言を言う、日蓮をこの島に生かしておいて、われ等夫婦は、御陵の前で念仏が唱えられますようか」

「……………」

「あなた様も八十をすぎた老体、口はともかく腕づくでは、日蓮一人あやめる訳にまいますまい。だから、婆々ながらも妾は、北面武士の妻女、妾も力を貸しましょうと、お出掛の時に言つたではございせんか」

「お婆々殿、腕づくで負けたのではない、負けまいと思つていた、口で負けた。明日からこの遠藤為盛は念仏は言わないのだ。御陵の前で南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経と唱える決心をしてきたのだ」

「ええつ、そりや、なんと言うことを言われます。念仏を唱えない、南無妙法蓮華経と言うのでございませうか」

女房はのけぞりかえる程にびっくり仰天した。暫し二人とも言葉がなかった。

「では、一体どう言うことが起つたのでございませうか。とくと、妾にきかせて下さい。考へ深いあなた様が、本心から言われる様子、夫に従うのは妻の掟てと申しますから、事と次第では、妾も、南無妙法蓮華経と唱えないものでもございませぬ」

「そう言うてくれるか、本当に嬉しいぞ。では塚原の三味堂で、聖人を襲つた時の話をしようか。なぜ、念仏の数珠をきつたか、そのいわれを聞かせようか」

「聞きましょう、お話し下さい」

女房は、炉の中に一段と薪をくべれば、為盛は、女房のくんだ湯をのんで、始めて腹をあたためて、じつと思ひ出すように、天井をながめていたが、やがて、語り出したのである。

「お婆々殿、今年で丁度、三十年、我等は、この佐渡島に順徳上皇様の御陵を御守護しまいたなあ」

「左様でございますとも、上皇様のお伴をして、真野の浜に上つてからは本年で五十一年目になりますぞ。あの時、上皇様のお船がどの浜にも波が荒らく、この真野の浜だけはよせてゆく波のみあつて、返す波がないので、御無事に船がつかしましたが、上皇様は、よせゆく波のみで返す波のないのは、二度と京都に帰えることがないのだと涙の中に御製あそばされたことを今でもおぼえております」

「そうだ、そうだったなあ、崩御されて三十年我等は、ひたすらに御陵を御守護して参つたのだ

が……」

「それが間違っておりましたか、とんと解せぬことでございます」

「簡単に言えば、間違いであつたぞ」

「わけがありましような、わけをおきかせ下さい」

「言わなくて、どうする、お婆々よく聞けよ」

「はい」

「我等は御陵の前に朝夕念仏して三十年まいつたが、未だこれを不思議と考へたことがなかつたなあ、崩御あそばされたから念仏をするのが役目だと思つて、御回向申し上げた。ところがなあ、我等が念仏申し上げるお方は、一体、この国においては如何なるお方様であつたのか……考へたことがあるかなあお婆々殿」

「かたじけなくとも、順徳上皇様は、一天万乗の大君にましましたにも不拘、この辺国佐渡において佐渡の土になられた、もつたいない御不幸なお方様であられました」

「この日本の国の大君となられる御方様は、天照太神の御魂のいりかわらせ給う御方なりと申し、五戒十善の勿体なくもあらひと神と申してもよい御方様ではないか、どうして、そのお方の

軍勢が、臣下の軍勢に負けたのであろうか、開闢以来天子の軍勢が負けたことがないのでどうして負けたのか、どうしてだ……」

「旦那さま、それは御無理でございます。あなた様はいやしくも、天皇を守護する北面の武士ではございませんか。なぜ、承久の乱に順徳様の軍勢が、負けたかは、充分御存知の筈、このお婆々にきく必要はありませんまい」

「これは負けた、これは言いすぎた、お婆々あやまるぞ」

「まあ、それはともかく、それが、なぜ、念仏をやめた理由になるのか、それを、おきかせ下さい」

「せくな、せくな、これから話さねば訳が充分にわからぬのじゃ、いいかなあ、我等は念仏は念仏、いくさはいくさと別々に思っておった、ところが、それがそうではないのだ」

「どうそうではないのですか……」

「くどい婆々だなあ、せくなと言っに」

「お手前の口ぐせの婆々がはじまりましたなあ、如何にも妾は婆々でございますが、しかし」

「これこれ、お前の口ぐせの、がしかしが始まると、くどくなる、実は、なあ、膿も今さつき、聖人さまから教わったばかりじゃから、あまりせくと、うまく言えぬのだ」

「ほほほっ……」

女房はくつたくのない笑い顔を、炉辺の火にうつした。

「左様でしょう、塚原で教わったのに違いない、お前さまは、今迄そんなことを妾に言ったことがございせんもの」

「言わねばこそ、今迄なんにも知らず、念仏を唱えておったのだ、その念仏を今さつき捨てたところなのだ、お婆々よくきけよ」

「それは、さつき、お前さま、か言つたばかりでございます、もう一杯さ湯でもお上りなさいまし」

女房は釜から、湯をすくうと、炬ぶちにおかれた茶碗に湯をつぐのであった。

「天子真言と言われるくらいで、天子さまはみんな真言宗を御信仰あそばされておる、順徳上皇さまとても御信仰であった。その真言宗を、お聖人さまは、亡国の宗旨ときめつけられておるのだ。何故、真言は亡国かと儂が問うた時にお聖人さまは、証拠をもつて答えられた。承久三年六月十五日に何故天子が負けたかと言うに、天皇方がたのんだ真言三十五壇の秘法が満願の日に、しかも一日で天皇方は負けたのである。相手方の義時の軍勢方はなんの祈禱もしていない。祈禱した軍勢が祈禱しない軍勢に負けた。不思議ではないか。これを誰も不思議と思う者が日本中に一人もいない。お聖人は言われた、日本国中にこれを不思議と思う者なし、日蓮一人不思議と思えり、いやさ、このことを幼少より不思議として、出家得道したと言うのである。日蓮大聖人さま

は実は我等の味方であり、順徳上皇様を心中よりおいたわしいと思っておられる御方であったのだ

「して、それと、念仏無間とは如何なるつながりがあるのでございましょうか」

「まあ待て、お聖人さまは言われた。祈りのかなわざる仏法は眞の仏法ではない。現に天皇方に味方して朝敵伏滅の祈禱をなした高僧四十一人は念仏、眞言、禪、律宗の人々である。今の世に彼等の経々は利益なしと天下に証明したのであると申された。では何故、念禪眞言律の経が利益がないのかと言うと、釈尊の教えにそむいて、時代を忘却し、末世衆生の機根を知らぬからだと言われた。仏の教えに従えば今は、法華経の流布すべき時代であり、仏もそれを法華経に予言されておると言うのだ。法華経に予言された如く、仏滅後二千七百七十一年目にお生れ遊ばされたのが、お聖人さまだ。お婆々殿、私はあのお方様を、刀の下に置いて、真剣に斬ろうとした時、仏さまとは斯かる人と言うのだとはつきりと悟った。斬れなかった。どうしても斬れなかった。あのお方様は、仏さまだ、法華経を世間に行ずる仏さまだ」

「しかし、どうして、仏さまとも思われるそんな尊いお方が、このような流人の島、佐渡においでになられたのでしょうか、不思議でなりません」

「一天万乗の大君と仰がれた、順徳上皇さえも、この佐渡にきて、なくなられておる御時勢だ、仏さまが佐渡にこないでどうしよう。法華経の勸持品には、末世において、法華経を行ずる者

は、もろもろの無智の人より、悪口罵言される、又刀杖を加えられる、これが法華經の行者の姿であるとかかれてある。又悪口されきらわれて、しばしば所を追われると示されておる、今のお聖人の姿がそれである。この為盛は、白刃をかぎして、たしかに、大聖人さまこそ、この日本国を救う、法華經の行者、末法の仏さまと拝んだのだ」

「……………」

「女房、お聖人さまを飢え死にさそうとする念禪真言律の悪侶達は、塚原の四辺をかためて、一滴の水も一粒の米も、お聖人の喉を通すまいと警戒しておる、どうだ、儂の言うことが嘘か、本当か、これから、お聖人に食糧をもつていつて拝んでこい、仏さまだ、今の世の仏さまだ」

「真正直なお手前の言うこと嘘とは思えませぬ、そんなら妾はにがり飯をこしらえて一走りいつて参りましょうか」

「そうしてくれ、そしてこれからは、南無妙法蓮華經と夫婦で唱えることだ……南無妙法蓮華經と唱えなければ、順徳上皇様のみたましいは救われないぞ……」

「とんだ変りようでございますなあ」

「お婆々いそげよ、幸にこの夜更け、もう見張りも、おそらく手うすになったであろう、お聖人さまに、もつたいないがひもじい思いをさせておるのだ」

「承知承知、早速致します」為盛の女房は元氣よく炉辺から立ち上った。

